

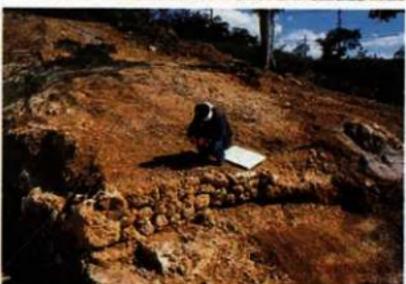
那覇市文化財調査報告書第59集

め かる こ ぼ ぐん
銘 苧 古 墓 群 (Ⅳ)

— 那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告 XIII —
— 天久公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告 IV —

2004年3月

那覇市教育委員会



卷首図版

- 1 段目左：発掘調査区近景
- 2 段目左：第 2 号墓作業状況
- 3 段目左：第 4 号墓作業状況
- 4 段目左：測量作業状況

- 1 段目右：第 1 号墓近景
- 2 段目右：第 3 号墓作業状況
- 3 段目右：第 5 号墓作業状況
- 4 段目右：測量作業状況

序

本報告書は地域振興整備公団による那覇新都心土地区画整理事業と、那覇市建設管理部花とみどり課による天久公園整備事業に伴って発掘調査を行った「銘苅古墓群北地区」(E地区)の成果を収めたものです。

本遺跡は那覇市の「那覇新都心」に位置し、平成11年度と平成14年度に調査が行われました。

「那覇新都心」の中には本遺跡以外にも、ナーチャー毛古墓群、安謝西原古墓群など、主に近世期に属する大規模な古墓群が存在します。これらの遺跡を調査することにより、沖縄における独特な葬儀制のあり方、またその精神世界などをうかがい知ることができ、より深く古来の人々に近づけることでしょう。本報告書が、市民の皆様はもとより多くの方々に活用されることを希望致します。

末尾になりましたが、発掘調査作業ならびに、本報告書を作成するにあたってご協力いただきました関係各位の皆様へ深く感謝申し上げます。

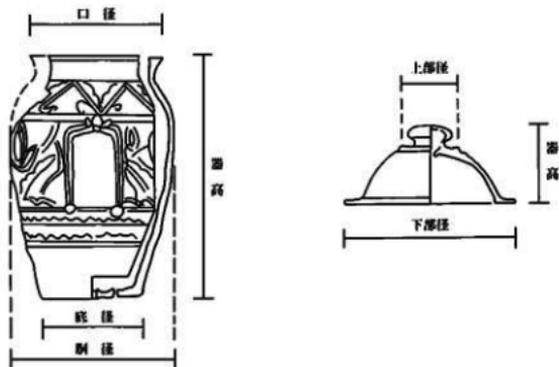
平成16年3月

那覇市教育委員会

教育長 仲田 美加子

例 言

1. 本書は、那覇市教育委員会が地域振興整備公団と那覇市建設管理部花とみどり課の委託を受けて、平成11年度と平成14年度に実施した「銘苅古墓群緊急発掘調査」（北E地区）の成果を収録したものである。
2. 本報告書の執筆・編集は樋口が行った。
3. 資料整理は下記のメンバーで行った。
実 測：真栄城和美 金城薫 山下真利子 仲井間美佐枝
分類・集計：座安知子 真栄城和美 山下真利子
表・図：真栄城和美 伊集尚子 金城薫 森田早苗 山下真利子
ト レース：金城薫
拓 本：金城薫 山下真利子
写真撮影・現像・焼付・割付：栗山初美 座安知子 真栄城和美 杉村千重美 高良夏枝
山下真利子 舘盛智秋 金武綾子
4. 遺物実測図の番号と写真図版の番号は一致するように配置してある。
5. 平成13～14年度に発掘調査を行った「銘苅古墓群北F地区」は、検討の結果、本報告書において「銘苅古墓群北D地区」の一部とした。
6. 平成11年8月～平成12年3月に公園整備事業に伴って調査された墓は、本報告書で第1号墓とした。平成14年6～8月に土地区画整理事業に伴って調査された1号墓は、本報告書で第2号墓とした。平成15年1月～3月に公園整備事業と土地区画整理事業に伴って調査された1～3号墓は、それぞれ第3～第5号墓とした。
7. 出土遺物は那覇市教育委員会文化財課で保管している。
8. 「第V章 1. 蔵骨器」観察一覽に関する凡例は以下のとおりである。



報 告 書 抄 録

ふりがな	め かも こ ぼ ぐん							
書 名	銘 苺 古 墓 群 (Ⅳ)							
副 書 名	那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告ⅣⅢ 天久公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅳ							
巻 次								
シリーズ名	那覇市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第59集							
編 著 者 名	樋口麻子							
編 集 機 関	那覇市教育委員会文化財課							
所 在 地	〒900-8553 沖縄 都道府県 那覇市樋川2-8-8 TEL 098-853-5776							
発行年月日	西暦 2004年 3月 5日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
所 取 遺 跡 名	所 在 地	市町村	遺跡番号	° . . . ° . . .	° . . . ° . . .	年 月 日	m ²	
めかもこぼぐん 銘苺古墓群(Ⅳ)	なほし 那 覇 市	47201		26度 14分 09秒 ～ 26度 14分 13秒	127度 41分 45秒 ～ 127度 41分 46秒	1号墓: 19990817～ 20000305 2号墓: 20020610～ 0828 3号墓～5号墓: 20030107～ 0307	1000 m ²	地域新興整備 公園による那 覇新都心土地 区画整理事業 ならびに那覇 市花とみどり 源による天久 公園整備事業 に伴う緊急発 掘調査
めかもこぼぐんきたらく (銘苺古墓群北地区)	おほ だい め かも 大 字 銘 苺 こ だい なほしみなと 小 字 港 川 原							
所 取 遺 跡 名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		備 考		
銘 苺 古 墓 群	古 墓 群	近 世	古 墓	蔵骨器 中国産磁器 本土産磁器 沖縄産陶器 簪 銭貨				

「銘苺古墓群(Ⅳ)」報告書目次

序

例言

報告書抄録

第Ⅰ章	調査に至る経緯	1
第Ⅱ章	遺跡の位置と環境	1
第Ⅲ章	調査経過と調査組織	2
第1節	調査経過	2
第2節	調査組織	5
第Ⅳ章	遺構	7
第Ⅴ章	遺物	16
1.	蔵骨器	16
2.	容器	18
3.	煙管	20
4.	簪	21
5.	器種不明	21
6.	銭貨	23
第Ⅵ章	総括	25

挿 図 目 次

第1図	那覇市内の主要な古墓群	
第2図	1947年頃の地形と遺跡分布	3
第3図	銘苺古墓群北地区	4
第4図	第1号墓実測図	8
第5図	第2号墓実測図	9
第6図	第3号墓実測図	11
第7図	第4号墓実測図	13
第8図	第5号墓実測図	15
第9図	蔵骨器	17
第10図	容器：中国産磁器、本土産磁器、 沖縄産施釉陶器	19
第11図	容 器：沖縄産無釉陶器 煙 管：沖縄産施釉陶器製、 青銅製品 簪 器種不明	22
第12図	銭貨	24

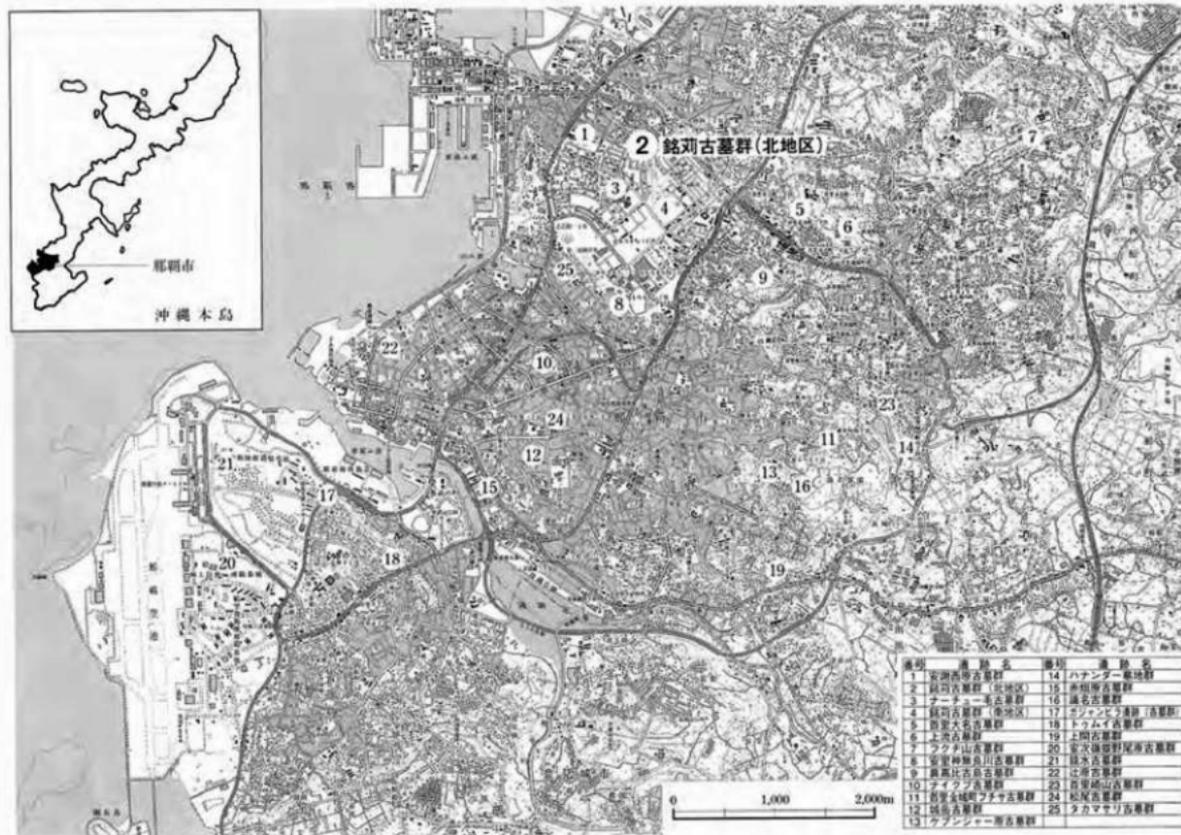
挿 表 目 次

第1表	蔵骨器観察一覽(蓋)	16
第2表	蔵骨器観察一覽(身)	16
第3表	容器観察一覽	18
第4表	煙管観察一覽	20
第5表	簪観察一覽	21
第6表	器種不明観察一覽	23
第7表	銭貨観察一覽	23
第8表	銭貨出土一覽	23
第9表	遺物出土一覽	26

図 版 目 次

図版1	遺跡一帯の空中写真
図版2	第1号墓中・近景
図版3	第1号墓近景
図版4	第2号墓近景
図版5	第2号墓発掘調査状況

- 図版 6 第 2 号墓完掘状況①
図版 7 第 2 号墓完掘状況②
図版 8 第 2 号墓実測作業状況
図版 9 第 2 ～ 5 号墓中・近景
図版 10 第 3 号墓近景①
図版 11 第 3 号墓近景②
図版 12 第 3 号墓近景③
図版 13 第 4 号墓近景①
図版 14 第 4 号墓近景②
図版 15 第 4 号墓墓室内
図版 16 第 3 ・ 4 号墓遺物出土状況
図版 17 第 5 号墓近景①
図版 18 第 5 号墓近景②
図版 19 第 5 号墓墓室内
図版 20 第 5 号墓近景③
図版 21 藏骨器
図版 22 容器
図版 23 容器、煙管、簪、器種不明
図版 24 錢貨



第1図 那覇市内の主要な古墓群

銘苅古墓群北地区調査報告書

第Ⅰ章 調査に至る経緯

本遺跡は「那覇新都心」の一角に存する。ここは、1951（昭和26）年に米軍用地に接収され、1973（昭和48）年の日米返還合意に基づき、1987（昭和62）年に返還された。その後、地域振興整備公団（以下公団）による区画整理事業が始まることとなる。

那覇市教育委員会では、1985（昭和60）年に「那覇市歴史地図事業に伴うアメリカ軍施設内合同調査」を実施し、同地区において2遺跡を確認している。さらに1988（昭和63）～1989（平成元）年度にかけては、埋蔵文化財の分布調査および試掘調査が実施された。その結果、合計9遺跡の存在が判明した。本古墓群はその時期に確認された遺跡の一つである。

銘苅古墓群は北地区と南地区に大別され、さらに北地区はA～E地区に細分される。この内、A～D地区は公団による整理事業に伴い、1992（平成4）～1999（平成11）年度にかけて発掘調査が行われた。今回報告するのはE地区である。本地区は1999（平成11）年度と2002（平成14）年度に調査された地区である。なお、D地区の一部については公団整備事業に伴い、2001（平成13）～2002（平成14）年度にかけて発掘調査が行われている。

E地区は那覇市建設管理部花とみどり課（以下花とみどり課）による天久公園整備事業と、公団による土地区画整理事業の両事業区にまたがっており、それぞれの事業に伴って調査が行われた。

本地区は5基の墓から成る。1号墓は、1999（平成11）年8月～2000（平成12）年3月にかけ天久公園整備事業に伴い発掘調査が行われた。2号墓は、2002（平成14）年6～8月に土地区画整理事業に伴い発掘調査が行われた。3～5号墓は両事業区にまたがっていたため、両事業に伴い2003（平成15）年1～3月にかけ発掘調査が行われた。

註

1. 2001 金武正紀・島弘ほか 「銘苅古墓群(Ⅲ)」 那覇市文化財調査報告書 第50集

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

本遺跡の所在する沖縄県那覇市は沖縄本島の南西部に位置し、面積38.99平方km、総人口307,128人（2002年9月現在）を擁する県庁所在都市である。本市は東中国海に西面し、東側に弁ヶ嶽・首里城付近を頂点とする台地があり、南側には小椋台地がある。また、北側は天久台地がある（第1図）。

現在、那覇市においては本市西側の県庁周辺地域に企業や官公庁が集中しているが、本市北西側にあった米軍基地が返還されたことに伴い、その跡地が「那覇新都心」として開発され脚光を浴びている。

銘苅古墓群北地区は、この「新都心」の中にある。ここは台地に囲まれた、やや開けた地である。

新都心の中を、南から北に向けて銘苅川と大湾川が流れている（第2図）。これらの河川の両岸に

は琉球石灰岩を基盤とする台地があり、その崖沿いに銘苅古墓群南地区がある。両河川は合流し、多和田川と名を変えて、安謝川へと連なり海へと注がれる。この多和田川沿いの両岸にあるのが、銘苅古墓群北地区である。この地区はA～E地区までに細分され、今回報告するのはE地区である。

銘苅古墓群北E地区は、那覇市大字銘苅小字港川原に所在する。現在この一帯は住宅地である。しかし、文献や石碑などから復元された15世紀初め頃の那覇地図によればこの付近まで入り江があったようであり、このことから「港川原」の地名が付いたことが容易に推測される。本地区は琉球石灰岩台地の崖沿いに広がっており、今回は残存していた5基のみの調査・報告であるが、本来は墓数がもっと多かった可能性もある。

新都心の中には、本遺跡以外にもいくつかの古墓群が所在する(第2図)。「安謝西原古墓群」・「ナーチャー毛古墓群」などがそれぞれである。いずれも琉球石灰岩を掘込んで造られた、近世を主要な年代とする古墓群である。

注

1. 1985 日崎茂和 「第一編 第一章 第二節 古地理」 『那覇市史 通史篇 第一巻』

那覇市企画部文化振興課

第三章 調査経過と調査組織

第1節 調査経過

銘苅古墓群北地区は、1988(昭和63)年～1989(平成元)年にかけて実施された埋蔵文化財分布調査ならびに試掘調査の際に、その存在が確認された。先述したようにA～D地区は1992(平成4)年～2002(平成14)年にかけて発掘調査が行われている。

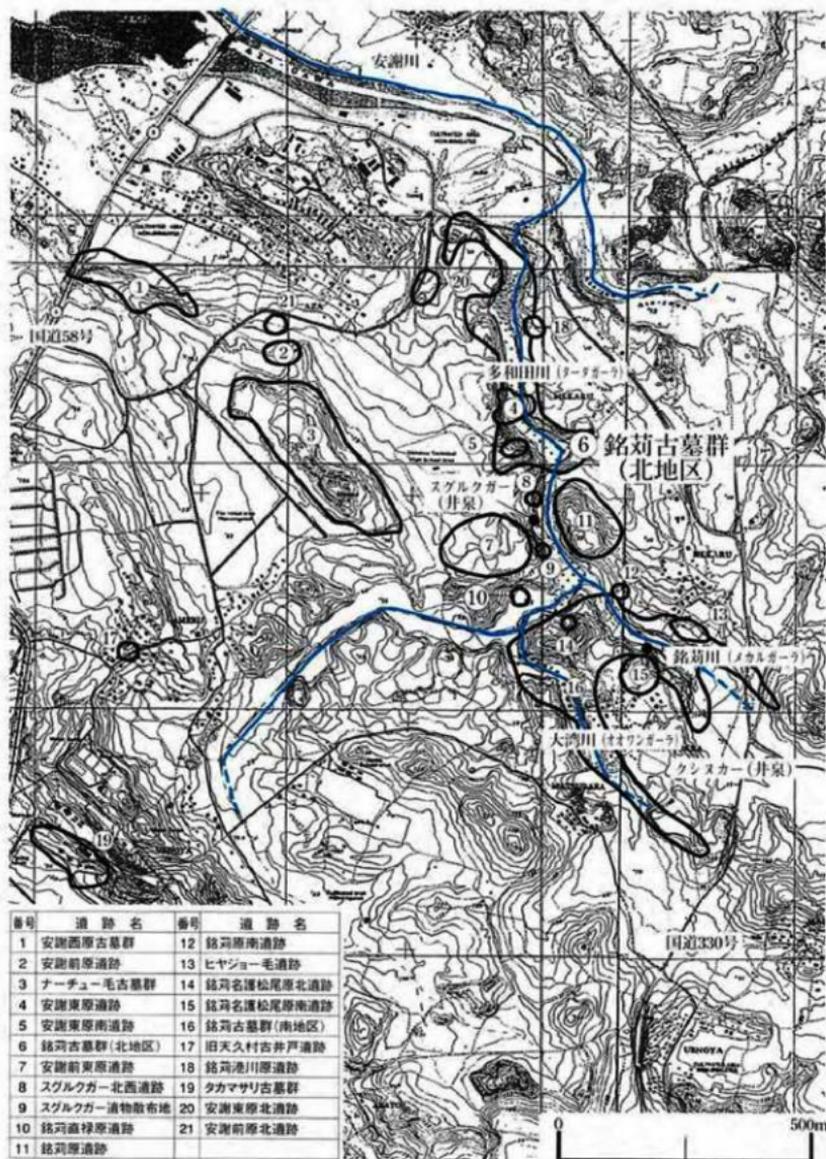
今回報告するE地区は、5基の墓からなる。以下に、各墓ごとに調査経過を記述する。

1号墓 1999(平成11)年8月17日、重機による銘苅港川原遺跡の表土剥ぎ作業を開始した。18日、偶然に墓の一部である石列が出土した。このことから墓の存在がわかり、銘苅港川原遺跡と併行して調査を行うこととした。また、表土剥ぎ作業中に長さ40cm～50cmの不発弾も検出されたため、警察に連絡し、23日に自衛隊によって撤収された。

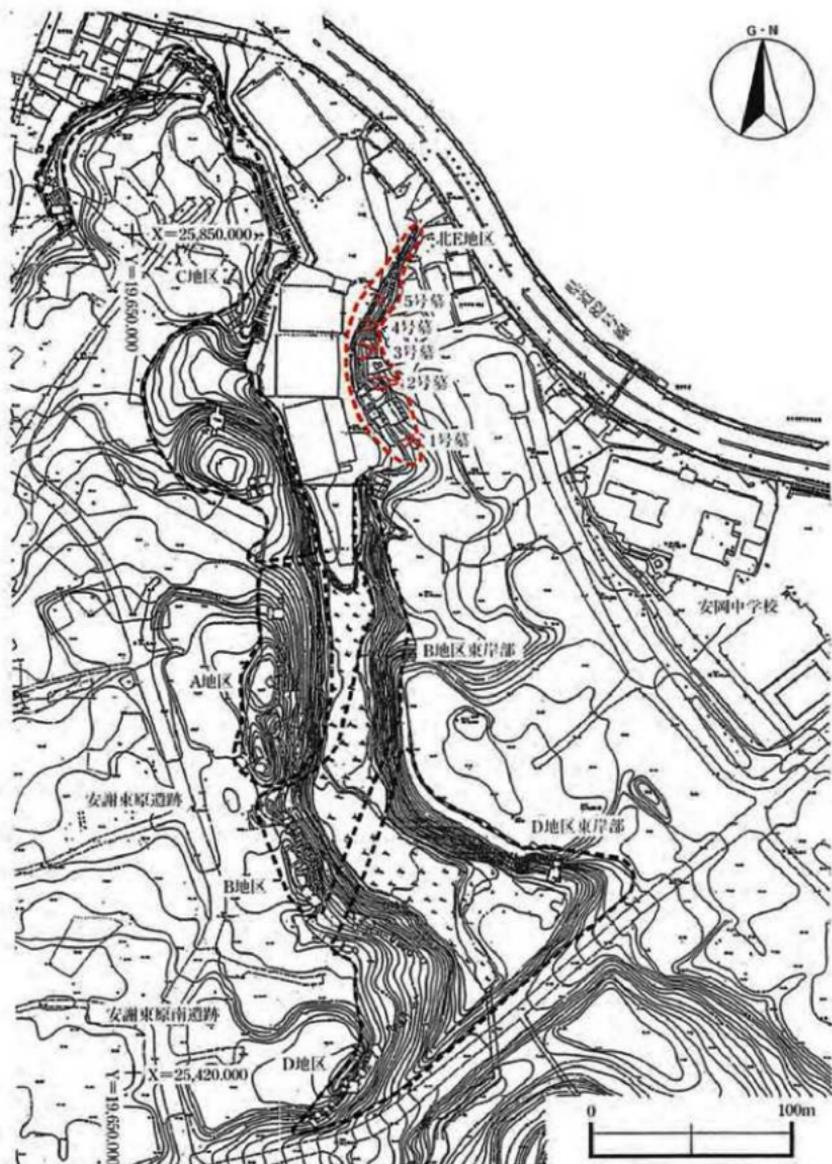
墓は重機によって埋土を除去する作業から開始した。まず、墓周辺の石列が検出され、予想よりも広範囲に広がる墓であることがわかった。9月1日、大まかに埋土を除去した後、調査作業員による作業に移行した。墓は多量の土砂で埋没していた。それらを取り除いた結果、墓は向かって左側部が完全に失われていることがわかった。これは、米軍による造成工事などの際に重機によって破壊されたと思定される。9月10日に墓検出作業は終了した。

墓は、基盤である琉球石灰岩を掘込んだ構造であった。墓屋根も崩壊が著しく、かろうじて、亀甲であったことが予測できる程度の残存状況であった。内部に安置された蔵骨器などはなく、周辺からその破片が拾える状況であった。調査は図面作成、ならびに写真撮影作業に主眼を置き、銘苅港川原遺跡の調査の合間を縫って断続的に作業を行い、2000(平成12)年3月に終了した。

2号墓 本墓は調査開始直前まで使用されており、内部の蔵骨器などの移転を待ってからの調査とな



第2図 1947年頃の地形と遺跡分布



第3图 铭碣古墓群北地区

った。

2002（平成14）年6月10日、重機によって墓の埋土を除去する作業を始めた。同月24日、調査補助員1名、調査作業員3名を加え、石列検出作業ならびに掘り下げ作業を開始した。その後、30日まで掘り下げ作業を行う。周囲の石列などの残存状況も比較的良好で、1号墓同様、大規模な墓であった事が伺える。墓庭には十字トレンチを設け、その構造観察を行った。なお、猛暑の中での樹根の除去など、作業は厳しいものであった。

8月2日～27日まで図面作成ならびに撮影作業を行い、同月28日に調査を終了した。

3～5号墓 5号墓は当初から地表面に出ていたため、その存在は把握していた。3・4号墓は公園による土地区画整理事業が行われるにあたって、2002（平成14）年7月に本遺跡の範囲確認調査が行われた際に新たに発見された。その際に各墓域の大まかな確認を行い、安全確保のため再び埋め戻した。

発掘調査は2003（平成14）年1月7日から開始した。重機によって墓周辺の樹木の伐採、ならびに表土剥ぎ作業を行った。

3号墓は墓室と墓庭、サンミデー部が確認されたものの、屋根などは損壊が著しく、全く確認できなかった。4・5号墓は墓室部分は残存していたものの、墓庭部は一部のみの残存であった。1月16日から調査作業員7名を加えて、各墓の掘り下げ作業に着手した。開始早々、5号墓の墓庭から人骨が入った蔵付器が発見された。公園の担当者に連絡後、本墓の元所有者に連絡し見ていただいたが、結果、所有者不明として当委員会で保管することとなった。

2月3日から図面作成作業に着手し、その合間に写真撮影作業を行い、3月7日に調査を終了した。

第2節 調査組織

本遺跡の調査組織は次の通りである。

調査責任者	那覇市教育委員会	教育長	渡久地政吉（平成10年度～平成13年度）
“	“	教育長	仲田美加子（平成14年度～）
調査総括	那覇市教育委員会文化財課	課長	金武 正紀（平成9年度～平成14年度）
“	“	課長	占塚 達朗（平成15年度）
調査事務	“	主幹係長	占塚 達朗（平成10年度）
“	“	係長	真境名充子（平成11年度）
“	“	係長	喜納 曙（平成12年度～平成14年度）
“	“	主幹係長	喜納 曙（平成15年度～）
“	“	主任主事	親川 登（平成11年度～平成12年度）
“	“	主任主事	森田 勝（平成13年度）
“	“	主任主事	上原 善英（平成14年度～）
“	“	臨時職員	上原 文乃（平成11年度）
“	“	“	小嶺 桐子（平成12年度）
“	“	“	喜屋武朋子（平成14年度）
調査員	“	主任専門員	島 弘
“	“	専門員	玉城 安明

調 査 員	那覇市教育委員会文化財課	専 門 員	仲宗根 啓
〃	〃	〃	樋口 麻子
〃	〃	〃	常銘 山嗣

発掘調査作業員ならびに協力者

平成11年度（1号墓）

仲宗根久里子・伊禮ヒロ子・上地常寛・金城信徳・近乗睦子・瑞慶覧長祐・玉城利江子
 桃原佐恵美・又吉宗泉・宮城新一・山下美也子・饒平名淳子（世話人）

平成14年度 第1次（2号墓）

謙久里昌代・桃原佐恵美・比嘉千賀子・古堅かつえ

平成14年度 第2次（3～5号墓）

謙久里昌代・山川由美子・大城次雄・佐久真喜美・高崎柳子・徳永順・登川敦嗣・比嘉清志
 矢笠常代

第Ⅳ章 遺 構

墓はいずれも石灰岩を掘込んだ構造である。損壊が著しく、1号墓～3号墓は周囲の石列など一部を残しているものの、墓室部分は殆ど残存せず、4号墓と5号墓は墓室部分の残存は比較的良好い、墓庭部分が一部失われている。

1号墓は墓の左部が失われた状態で検出された(第4図 図版2・3)。

岩を掘込み、切石を置き、岩と切石の間は裏込めの細かな石で充填している。屋根は石列の残存状況から、亀甲であったことが想定される。サンミデー部などの痕跡が無いため墓室と墓庭の区別は判然とせず、タナの有無なども不明である。周辺には石列を巡らし、規模の大きな墓であったことが窺われる。炭骨器などは、その破片が周囲から得られるのみであった。

また、屋根の一部に漆喰が認められ、断面観察によって、赤土を塗った後にさらに漆喰を塗ったことがわかる。さらに、墓周囲の一部には赤土を入れて造成し、その上に石列を巡らしている。

2号墓も1号墓と同様な構造の墓である(第5図 図版4～8)。岩を掘り抜き、屋根は石列の残存状況から亀甲であったことが想定される。墓室内のタナは奥に3段、左右に1段ずつある。これらは岩をはつり、コーラルで造成した形跡が認められる。

墓庭には高さ60cm～110cmの垣が巡らされ、それが正面中心からやや右寄りの箇所で途切れている状況から、ここが墓への入口であったことが想定される。また、墓庭入口から墓庭外にかけて石列が検出されたが、その性格については判然としなかった。

この墓も屋根の一部に漆喰が認められ、断面観察の結果、赤土の上に漆喰を塗っていることがわかる。

3号墓は破損が著しく、石灰岩を掘り込んだことはわかるが、屋根や墓室内の構造などについては判然としなかった(第6図 図版10～12)。

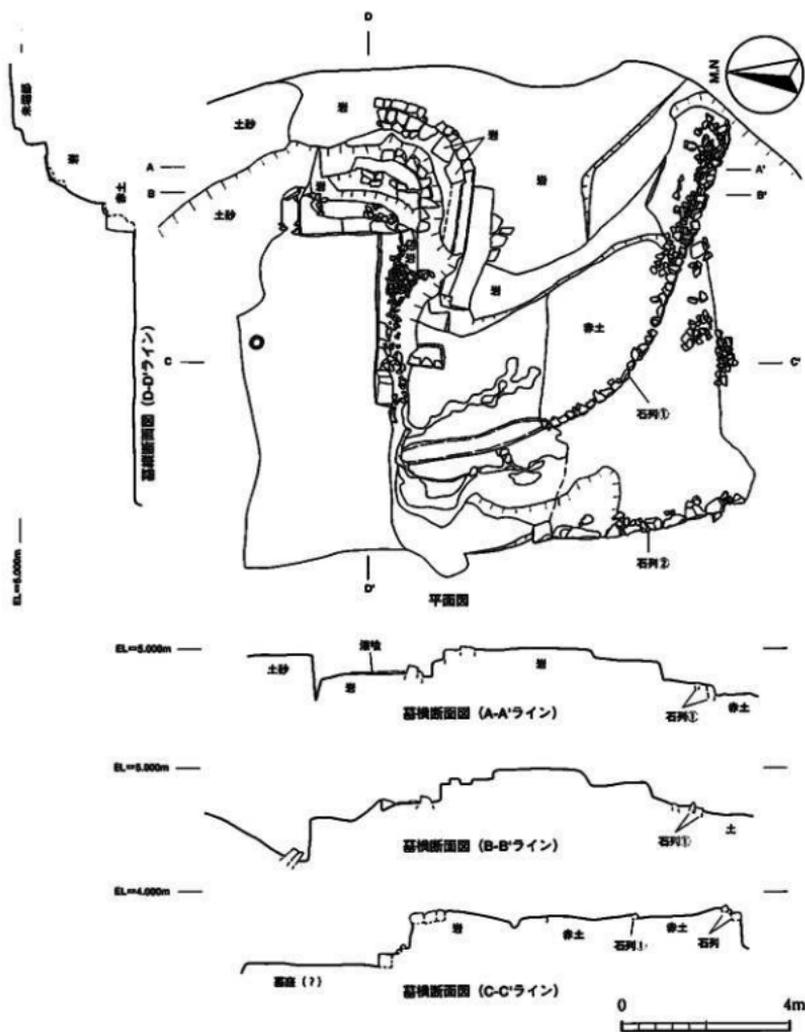
墓室は本来さらに奥に広がる可能性もあったが、土砂の堆積が厚く、除去するには危険を伴ったためこれ以上の掘削は行わなかった。また、墓室は右奥にやや膨らんだ形状を呈しているが、そこに一部黒色化した数個の石灰岩があった。これは防空壕として墓室の一角を掘り広げ、そこに竈を設けていた痕跡と考えられる。墓室からは銃弾が土嚢袋一袋ほど検出された。

サンミデーは墓庭より一段高く造り出されており、緑石を配している。墓庭右垣にソデ墓があり、内部から沖縄産施釉陶器片などと共に寛永通寶4枚、乾隆通寶1枚が出土した。しかし、ソデ墓の墓口は発見当初から開いており、これらが原位置にあるかは不明である。

4号墓は石灰岩を横位に掘り込んでいる(第7図 図版13～15)。屋根は平坦になっているが、これは米軍などによる造成工事の際に削平されたためではないかと考える。

墓室内には、石灰岩を掘り込んで造った高さ約30cmのタナが奥に一段もうけられている。また、墓庭左隅からは、煙管9点、壺2点、杯2点が出土し(第7図 図版16)、これらは意図的に埋められたものと推測される。

5号墓も石灰岩を横位に掘り込んだ構造である(第8図 図版17～20)。屋根の形態は、判然としない。岩を掘込み緑石を配した高さ約10cmのタナが、墓室内左右と奥にある。

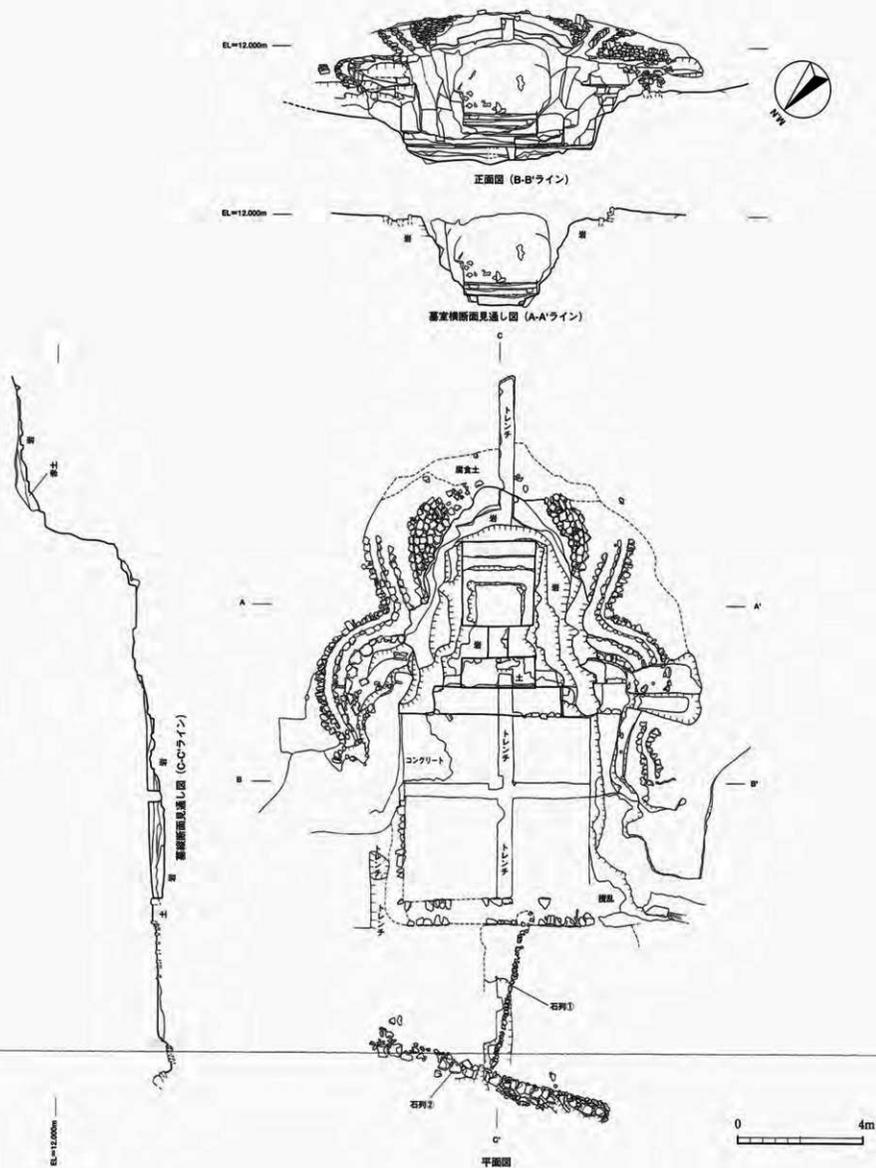


1号墓

(単位: cm)

立地場所 の基礎	外観 形式	墓口の 構築方法	墓口 奥行 幅	墓庭の 構築方法	サンミデー の有無	墓室の 平面形	墓室 奥行 幅	タナ数	特 徴
			高さ				高さ	奥 左	
琉球石灰岩	亀甲墓	基礎を掘込 む。	—	基礎を掘込 む。一部切 石積み。	—	方形?	—	—	墓の一部に漆喰が認められる。下に赤 土を敷き、漆喰を塗っている。墓周囲は 一部を赤土で造成している。

第4図(図版2・3) 第1号墓実測図



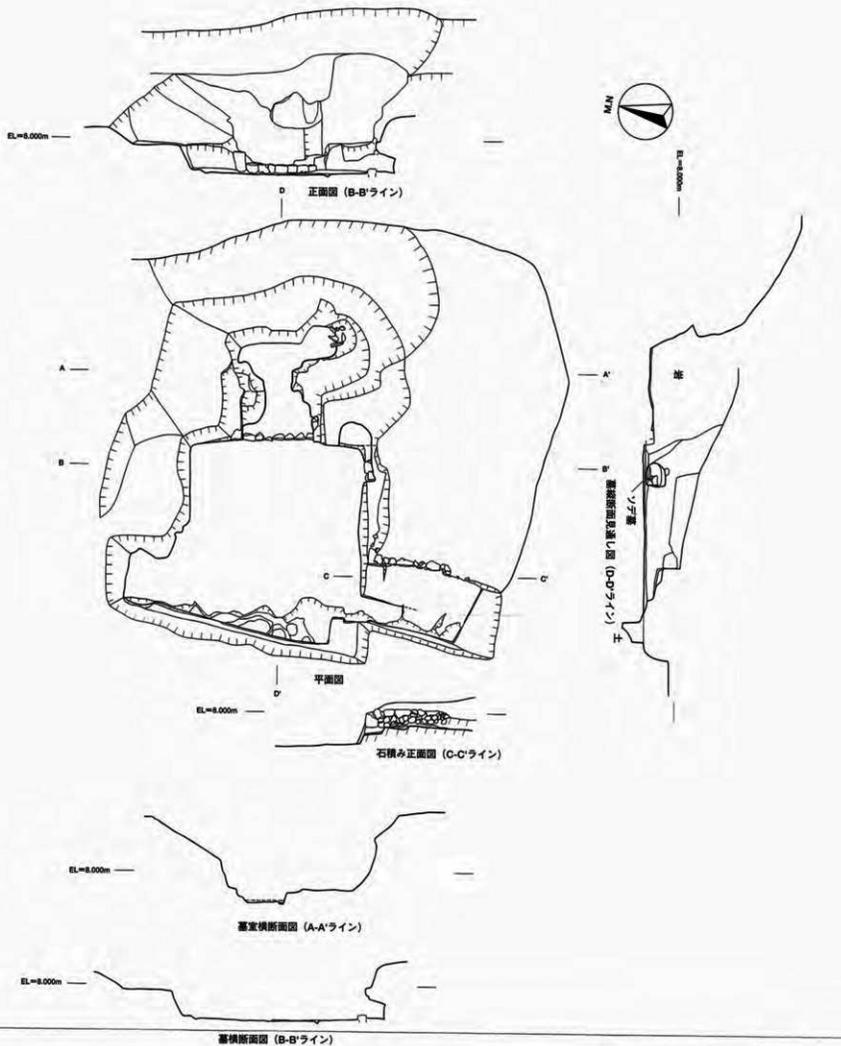
2号墓

(単位: cm)

立地場所 の墓盤	外観 形式	墓口の 構築方法	墓口 奥行 幅 高さ	墓庭の 構築方法	サンミデー の有無	墓室の 平面形	墓室 奥行 幅 高さ	クサ敷 奥 右 左	特 徴
琉球 石灰岩	亀甲墓	(石積み)	100 64 —	墓盤を掘込み、 石積み。	有	方形	270 232 —	3 1 1	墓入り口は中心よりやや右寄りであったと推定される。赤土の上に塗喰を塗布している。破損が著しいが、屋根部の残存状況から亀甲墓であると推定される。

第5図 (図版4～8) 第2号墓実測図

()内は推定



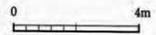
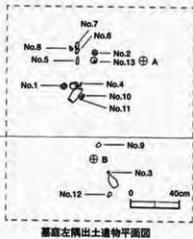
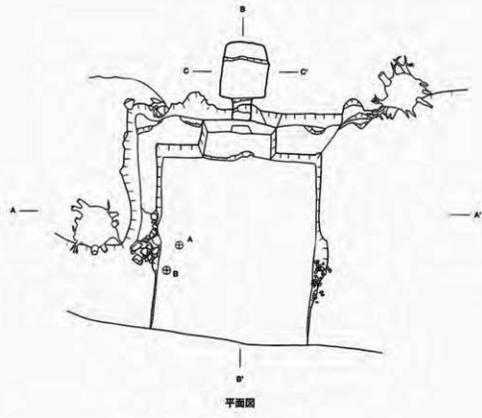
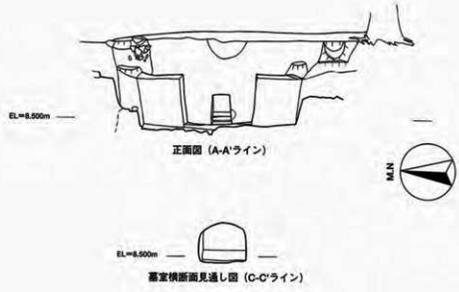
3号墓

(単位: cm)

立地場所 の基盤	外観 形式	墓口の 構築方法	墓口 奥行 幅 高さ	墓庭の 構築方法	サンミデー の有無	墓室の 平面形	墓室の 奥行 幅 高さ	奥 右 左	特 徴
琉球 石灰岩	-	基盤を掘込 む。	(88) (64) -	基盤を掘込 む。	有	-	- - -	- - -	破損が著しく、全形は不明、サンミデー部と墓庭の一部に石積みが確認される。墓室内には厚さ1cmの炭層が堆積しており、また、右奥に戦時中に使用された竈に見られる石灰岩の集積がある。

第6図 (図版10-12) 第3号墓実測図

()内は推定値

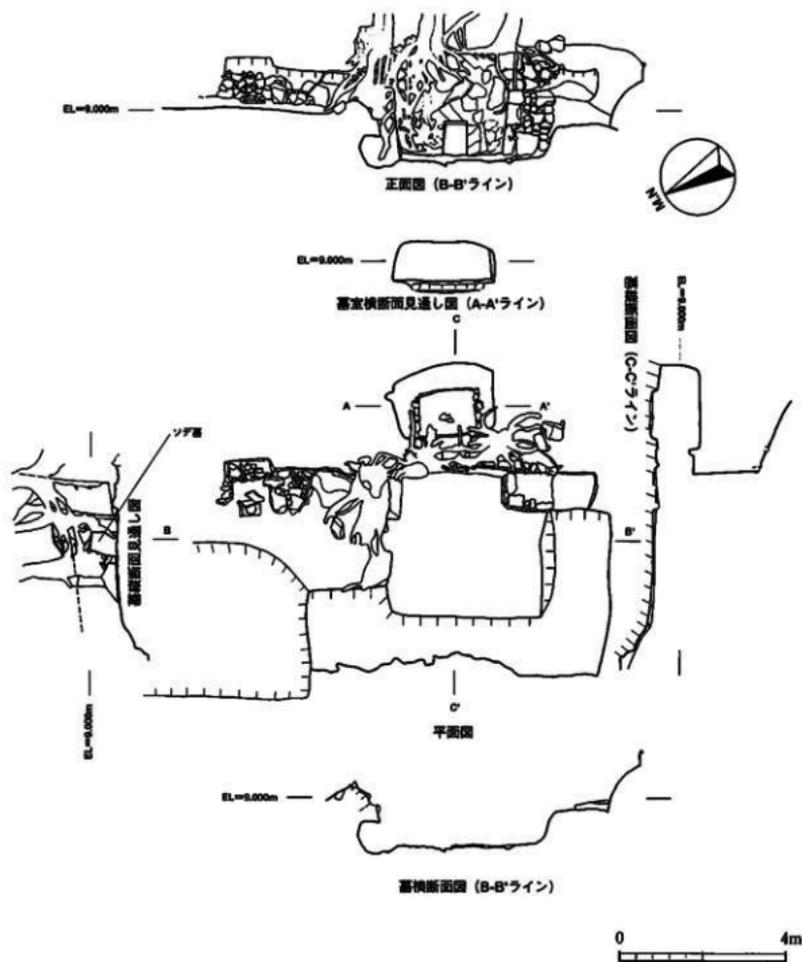


4号墓

(単位: cm)

立地場所 の基盤	外観 形式	墓口の 構築方法	墓口 奥行 幅 高さ	墓庭の 構築方法	サンミダ の有無	墓室の 平面形	墓室 奥行 幅 高さ	ク タ 敷 奥 石 左	特 徴
琉 球 石灰岩	—	基盤を掘込 む。一部石 積み。	106 61 92	基盤を掘込 む。一部石 積み。	有	方形	190 160 130	1 0 0	石灰岩基盤を掘込み、構築。墓庭を囲む垣の一部には石積みもあったようである。屋根は現状は平野であるが、造成工事などの際に削平されたものと考えられる。

第7図 (図版13~15) 第4号墓実測図



5号墓

(単位：cm)

立地場所 の基礎	外観 形式	墓口の 構築方法	墓口 奥行 幅 高さ	墓庭の 構築方法	サンミデー の有無	墓室の 平面形	墓室 奥行 幅 高さ	タナ数 奥 右 左	特 徴
琉球 石灰岩	-	基盤を掘込 む。	80 70 80	基盤を掘込 む。	有	方形	172 249 120	1 1 1	屋根の形状は判然としない。左垣にソ デ墓有り。

第8図(図版17~20) 第5号墓実測図

第V章 遺物

出土した遺物は総数1,312点である。蔵骨器や小杯、瓶などの墓に関連すると考えられる資料も得られているが、鍋・鉢など直接関連しないと思われる資料も多数混在する。

ここでは、蔵骨器・容器・煙管・罎・器種不明・古銭を記載した。容器の項は産地別・器種別に記載すべきかと思われるが、資料数が少ないため一括して記載した。

1. 蔵骨器

今回得られた資料は蓋5点、身6点の計11点の資料である。いずれも4号墓と5号墓からの出土であるが、全て墓室外より得られたものである。

ここでは、形が同える資料のみ図化した。蓋はいずれも大きな宝珠を有するタイプである。身は貼付けと線彫りによる装飾が認められ、外面にマンガンを塗布したいわゆるマンガンタイプといわれるものである。破損のため判然としなが、残存部から推定すると大きさに差異が認められる。第9図4は小型のタイプ、6・7は大型のタイプに属すると考えられる。

第1表 蔵骨器観察一覧(蓋)

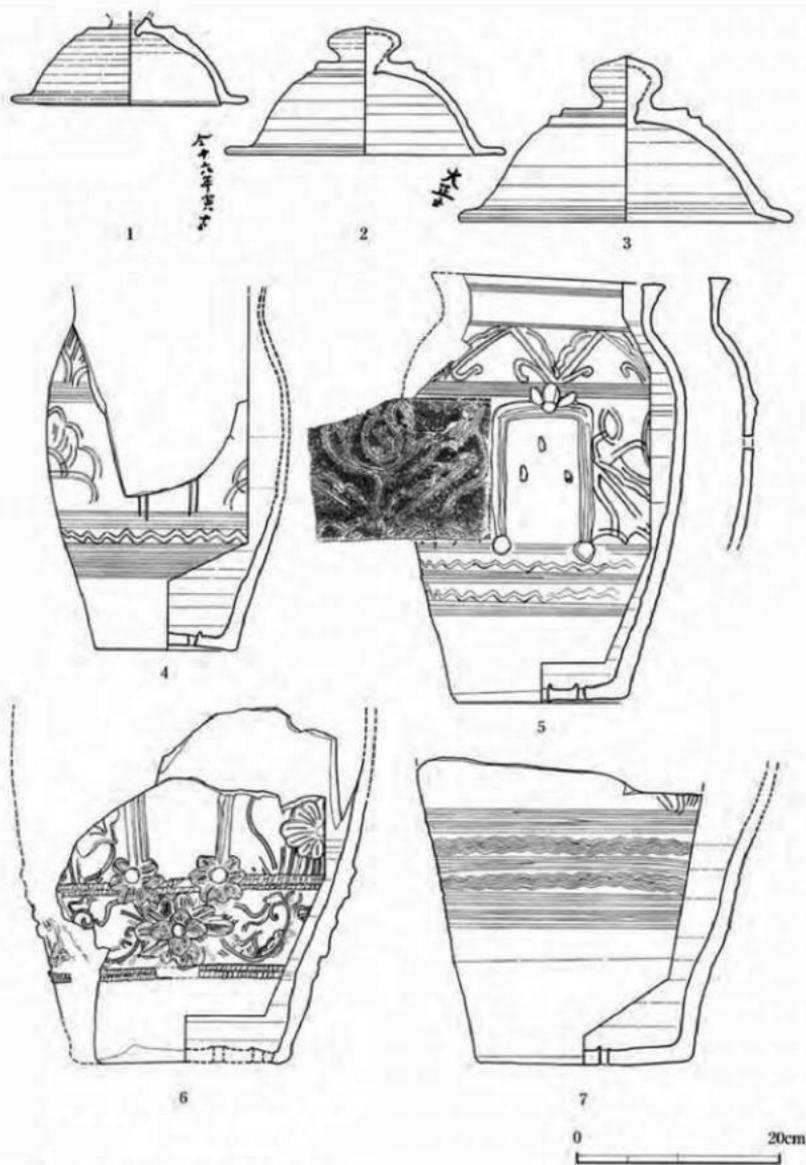
(単位: cm)

挿図番号 図版番号	名称又は仮称	上部径 下部径 器高	銘書	備 考	出土地点
第9図 1 図版21の1	陶製変形	8.6 23.6 —	あり	外面にはマンガンが施触されている。肩部で一段高くなり、その上に宝珠状の取手が付いていたと考えられる。内面に「全十六年寅十(月)…」の銘書が読みとれる。破損のため、明確な年号までは確認できない。焼き締まりは良く、外面が黒灰色に対して、内面は赤褐色を呈している。	第4号墓庭
第9図 2 図版21の2	陶製変形	9.3 28.0 12.9	あり	外面にはマンガンが施触されている。肩部で2段高くなり、その上に宝珠の取手が付けられている。内面には「大正…」の銘書が読みとれる。また、マンガンの付いた手で持ったらしく、内面に指跡がある。胎土には1mmの黒色粒子、2mmの白色粒子などを含み、4~8mmの巻貝の破片などもある。	第4号墓庭
第9図 3 図版21の3	陶製変形	12.3 33.5 16.6	なし	外面にはマンガンが施触されている。肩部で2段高くなり、その上に宝珠の取手が付けられている。胎土には1mmの褐色粒子、5mmの巻貝の破片を含むが、さほど多くは無い。内面にはマンガンの付いた指跡がある。	第4号墓庭

第2表 蔵骨器観察一覧(身)

(単位: cm)

挿図番号 図版番号	名称又は仮称	口径 胴径 底径 器高	銘書	備 考	出土地点
第9図 4 図版21の4	陶製変形	— (24.2) 13.9 —	なし	小型の変である。外面にはマンガンが施触されている。破損のため正面の孔は確認できない。外面に線彫りによる装飾が施されている。底部外縁は面取りされており、底面には円形の孔が11ヶ所穿孔されている。	第4号墓庭



第9図(図版21) 蔵骨器：蓋(1~3)、身(4~7)

(単位: cm)

神宮番号 図版番号	名称又は假称	口径 胴径 底径 器高	銘字	備 考	出土地点
第9図 5 図版21の5	陶製変形	(23.3) 28.4 16.8 42.9	なし	外面にマンガンが施軸されている。正面には長方形の孔が3ヶ所穿孔されている。胴部には線形りと貼り付けによる裝飾が認められる。底部外縁は面取りされており、底面には半円形の孔が10ヶ所穿孔されている。	第4号墓底
第9図 6 図版21の6	陶製変形	— (20.2) —	なし	マンガンが施軸されている。貼り付けと線形りによる裝飾が施されている。底部外縁は面取りされており、円形の孔が確認されるが、破損のため詳細は不明である。	第5号墓底
第9図 7 図版21の7	陶製変形	— — 20.9 —	なし	外面にはマンガンが施軸されている。上部が大きく破損しているため、正面の孔は不明である。外面には線形りや波状文などによる裝飾が施されている。底部外縁は面取りされ、底面には少なくとも半円形の12ヶ所の孔が穿孔されている。重量のある資料である。	第4号墓底

()内は推定値

2. 容 器

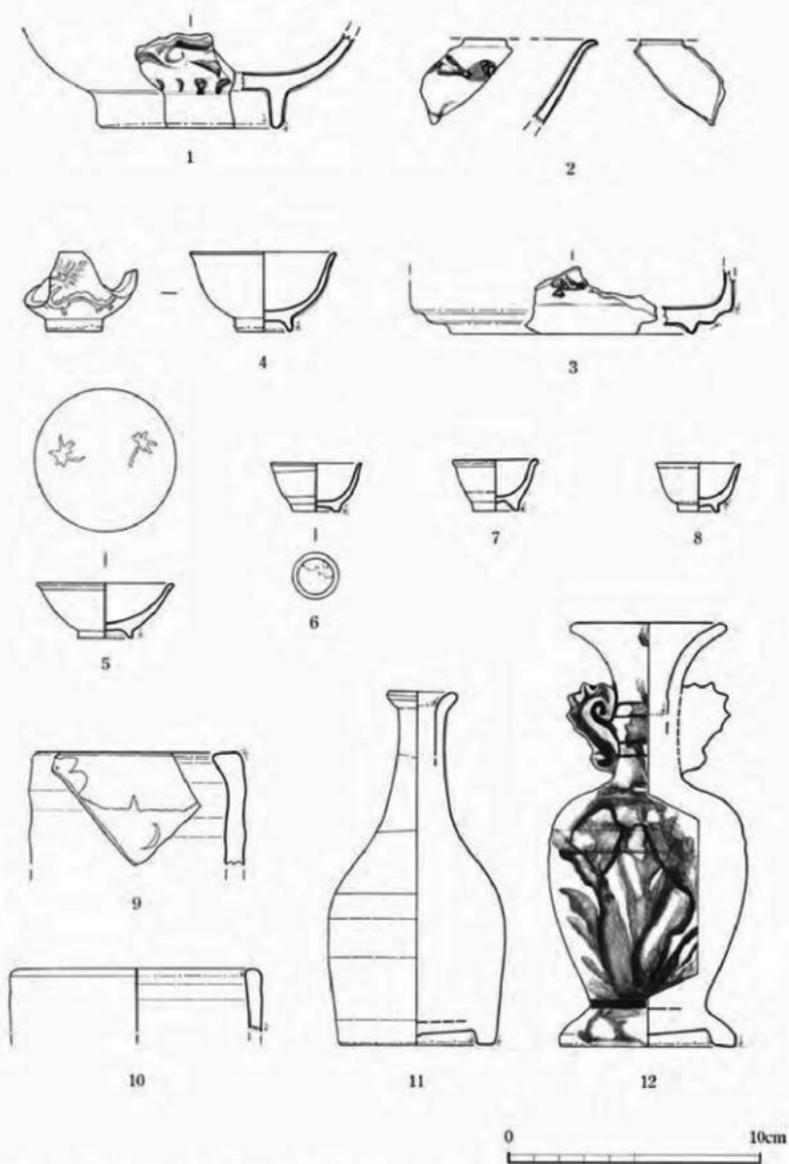
ここでは出土資料の中から墓に関連すると思われる資料を選別し、記載している。様々な器種があるが、ここでは一括して記載した。

第10図1・2は碗である。3は内部にも施軸されており、蓋物の可能性もあるが判然としない。いずれも中国産と推定される。4～8は杯である。4～6は本土産磁器、7・8は沖繩産施軸陶器である。9・10は沖繩産施軸陶器の炉である。いずれも、筒型の形状を呈していると推測される。11・12は沖繩産施軸陶器の瓶である。第11図1は沖繩産無軸陶器の壺である。

第3表 容器観察一覧

(単位: cm)

神宮番号 図版番号	名称又は假称	口径 器高 底径	色調(軸色)	備 考	出土地点
第10図 1 図版22の1	碗 (中国産磁器)	— — 7.0	淡青色	器体外面には文様が描かれている。内底面にも淡青色の圓線が確認される。軸厚は0.4mmで、畳付部は軸割ぎされている。貫入は認められず、光沢感がある。	第2号墓 扇根
第10図 2 図版22の2	碗 (中国産磁器)	— — —	暗青緑色	口縁部が外反した形状である。外面口縁部に圓線が1条巡らされ、体部には文様が描かれている。内面口縁部にも圓線が巡らされているが、内面にはそれ以外の文様は認められない。貫入は認められず、光沢感はない。	第2号墓 扇根右部
第10図 3 図版22の3	— (中国産磁器)	— — 9.6	暗青色	外面器体下部に1条の圓線が巡らされており、体部には文様が描かれている。内外面に施軸されている。内面口縁部のみ軸割ぎされている。全面に細かい貫入が認められ、若干の光沢感がある。	第2号墓 左埋土
第10図 4 図版22の4	杯 (本土産磁器)	5.8 3.1 2.1	淡青色	口縁部は僅かに外反した形状である。内面は無文だが、外面には龍のレリーフ文様がある。内外面に施軸されているが、畳付部のみ軸割ぎされている。内面と畳付部から外底面にかけては白色、器体外面のみ淡青色である。	第2号墓 石列の周辺
第10図 5 図版22の5	杯 (本土産磁器)	5.5 2.2 2.2	白色 赤色(文様)	口縁部は僅かに外反した形状である。内外面に施軸されているが、畳付部のみ軸割ぎされている。内面には紅紫のような文様が2箇所あり、赤で彩色されている。他は白色のみ。貫入は認められず、光沢感がある。	第4号墓 No.13
第10図 6 図版22の6	杯 (本土産磁器)	3.7 1.9 1.8	白色	全面に施軸されている。外底面には土塊の溶着が認められる。貫入は認められず、光沢感はない。	第3号墓 墓底左部



第10圖(國版22) 容器：中國產磁器 碗(1·2)、器種不明(3)
 本土產磁器 杯(4~6)
 沖繩產施釉陶器 杯(7·8)、伊¹(9·10)、甌(11·12)

(単位: cm)

神図番号 図版番号	名称又は仮称 (沖縄産施輪陶器)	口径 器高 底径	色調(釉色)	備考	出土地点
第10図 7 図版22の7	杯 (沖縄産施輪陶器)	3.4 1.9 1.6	灰白色	外面下部から外底面にかけての部分を除き、施輪されている。登付部は平皿に整形されており、全体として丁寧な作りである。全面にやや粗い貫入が認められ、光沢感がある。	第4号墓 No.2
第10図 8 図版22の8	杯 (沖縄産施輪陶器)	3.5 2.0 1.8	黄褐色	口縁部が肥厚した形状である。登付部から外底面にかけての部分を除き、施輪されている。7と同様に登付部は平皿に整形され、丁寧な作りである。細かい貫入が内外面に認められ、光沢感がある。	第4号墓 基礎左部
第10図 9 図版22の9	伊 (沖縄産施輪陶器)	8.0 — —	暗緑色	口縁部は釉剥ぎされている。内面は上部に釉の痕跡が僅かに残るものの、それ以外は無釉である。外面には灰が被ったため、その痕跡があたかも文様のようにになっている。細かい貫入が認められ、光沢感がある。	第1号墓 墓床埋土
第10図 10 図版22の10	伊 (沖縄産施輪陶器)	9.6 — —	淡青色	外面から口端部までは施輪されているが、内面は無釉である。貫入は認められず、光沢感もない。	第1号墓 石列崩落部
第10図 11 図版22の11	瓶 (沖縄産施輪陶器)	2.9 1.4 6.0	黒褐色	口縁部がラッパ状をした形態である。内面は口縁部まで施輪されている。外面は施輪後、登付部を粗く釉剥ぎしている。色調は頸部上部から内面口縁部にかけては白色であるが、それ以外は黒褐色である。全面に細かい貫入が認められ、やや光沢感がある。登付部に土塊の溶着などが認められ、粗く整形された印象を受ける。	第4号墓 No.3
第10図 12 図版22の12	瓶 (沖縄産施輪陶器)	6.2 16.7 6.8	紺青色	胴上部が大きく張り出し、口縁部と底部がラッパ状をした形態である。頸部側面に耳が着けられている。前後面に同じ文様が青色と褐色の釉で描かれている。内面は頸部上部まで施輪されている。外面は施輪後、登付部を釉剥ぎしている。全面に細かい貫入が認められ、光沢感がある。	第3号墓室
第11図 1 図版23の1	壺 (沖縄産施輪陶器)	4.8 28.1 6.4	赤褐色	胴部が若干膨らむが、底部からはほぼストレートに立ち上がる形状である。口縁部はラッパ状に開く。胴部に3本の条線が、やや離れて胴上部に1本の条線が巡らされている。胎土は赤褐色を呈しており、縦割で焼きしめは良い。外面一部に灰被りの痕跡が認められる。	第4号墓 No.1

3. 煙 管

本遺跡では、12点の煙管が出土した。内訳は沖縄産施輪陶器製の雁首4点、吸口5点、青銅製の雁首1点、吸口2点である。

施輪陶器製は全て4号墓から出土しており、雁首と吸口の個数も一致するためそれぞれセット関係にある可能性が高い。

青銅製については、4号墓から出土した雁首(第11図9)と吸口(同図10)は出土地点も近く、これらもセット関係にある可能性が高い。もう1点の吸口は、3号墓庭より出土している。

第4表 煙管観察一覧

(単位: cm・g)

神図番号 図版番号	部位	材質	全長	孔 径		重量	出土地点
				火皿部/吸口部	接続部		
第11図 2 図版23の2	雁首	沖縄産施輪陶器	3.2	1.2	0.9	8.7	第4号墓 No.10
第11図 3 図版23の3	雁首	沖縄産施輪陶器	3.2	1.1	1.0	9.4	第4号墓 No.6

(単位: cm・g)

神図番号 図版番号	部位	材質	全長	孔 径		重量	出土地点
				火皿部/吸口部	接続部		
第11図 4 図版23の4	雁首	沖縄産施釉陶器	3.2	1.3	1.0	9.7	第4号墓 No.9
第11図 5 図版23の5	雁首	沖縄産施釉陶器	3.1	1.2	0.9	6.9	第4号墓 No.7
第11図 6 図版23の6	吸口	沖縄産施釉陶器	2.5	0.5	1.0	3.8	第4号墓 No.12
第11図 7 図版23の7	吸口	沖縄産施釉陶器	2.9	0.3	1.0	6.0	第4号墓 No.8
第11図 8 図版23の8	吸口	沖縄産施釉陶器	2.6	0.5	1.1	4.6	第4号墓 No.11
第11図 9 図版23の9	雁首	青銅	—	—	0.9	6.7	第4号墓 No.4
第11図 10 図版23の10	吸口	青銅	4.4	0.4	1.0	5.8	第4号墓 No.5

4. 簪

第11図11は青銅製の簪である。先端部は破損しているが、頭部は耳かき状を呈し、竿部は六角形である。男性用の副簪である「押差」と考える。

【参考文献】

- 1972 『沖縄文化史辞典』 琉球政府文化財保護委員会
 1979 真栄平房敬 「第2章 衣食住」 『那覇市史 資料編 第2巻中の7 那覇の民俗』
 1982 宝珍叢刊編集委員会 『宝珍叢刊第五集 琉球風俗絵図』

第5表 簪観察一覧

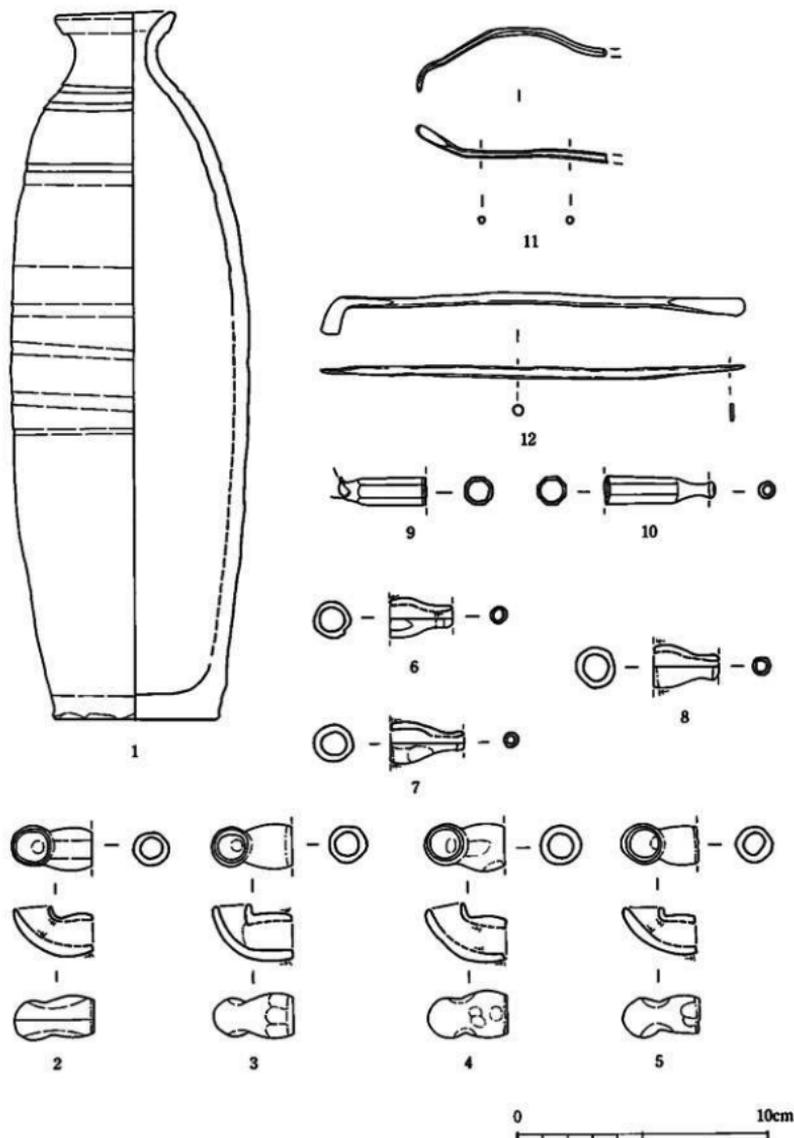
(単位: cm・g)

神図番号 図版番号	種類	法 量		備 考	出土地点
		長 さ	重 量		
第11図 11 図版23の11	簪	(7.5)	3.8	耳かき状である。首部から竿部は六角形である。竿部の途中より破損している。全体に青錆が附着している。	第2号墓 左垣埋土

()は残存長

5. 器種不明

第11図12は全体的に青錆の附着が認められるが、一部に赤錆の附着もある。若干鉄分が混入している可能性もあるが、磁気反応は認められない。1号墓室内埋土より出土しているが、この墓は破損が著しい。従って、本資料が墓に伴うものであるか否かは判然としなが、一応、ここに記載する。完形である。



第11圖(圖版23) 容 器：沖繩產無釉陶器 壺(1)
 煙 管：沖繩產施釉陶器製(2-8)、青銅製品(9-10)
 簪：(11)
 器種不明：(12)

第6表 器種不明観察一覧

(単位: cm・g)

挿図番号 図版番号	種類	法 量		備 考	出土地点
		長 さ	重 量		
第11図 12 図版23の12	—	16.8	15.3	両端が扁平で、さらに図上左部はし字状に曲った形状である。首部は四角形、肩部は鋸影れで判然としないが、六角形のようなものである。先端にいくつれ再び四角形となり、図上右部は扁平である。完形。全体に青錆が附着し、一部赤錆も見られる。	第1号墓 墓室内埋土

6. 銭 貨

銭貨は10点得られている。内訳は、寛永通寶6点、乾隆通寶1点、五銭（それぞれ大正十一年、昭和十七年の銘あり）2点、判読不明1点である。無文銭は出土していない。寛永通寶の中で第12図1は古寛永、2～5は新寛永である。3の背面には「元」の文字がある。6の背面には右に「蘇」、左に「寶」の満州文字がある。いずれも磁気反応が認められないため、材質は銅であると考えられる。

【参考文献】

- 1992 丁福保 『馬定祥批注 歷代古錢圖說』 上海人民出版社
 1995 川根正教 『寛永通寶銭の基礎的研究(上) 形式分類と編年』 『出土銭貨』第4号 出土銭貨研究会
 1999 鈴木公雄 『出土銭貨の研究』 東京大学出版会
 2000 山里千春 『第12節 銭貨』 『ナーチャー-毛占墓群』 那覇市文化財調査報告書 第44集

第7表 銭貨観察一覧

(単位: cm・g)

挿図番号 図版番号	銭貨名	国 名 初鋳年	法 量				背文	備 考	出土地点
			外徑	孔徑	厚さ	重量			
第12図 1 図版24の1	寛永通寶	日本 (江戸) 1636	2.5	0.7	0.1	2.6	なし		第1号墓 墓室内埋土
第12図 2 図版24の2	寛永通寶	日本 (江戸) 1697	2.3	0.7	0.1	3.0	なし		第3号墓 ソデ墓内
第12図 3 図版24の3	寛永通寶	日本 (江戸) 1697	2.3	0.7	0.1	2.6	なし		第3号墓 ソデ墓内
第12図 4 図版24の4	寛永通寶	日本 (江戸) 1697	2.4	0.6	0.1	3.8	なし		第3号墓 ソデ墓内
第12図 5 図版24の5	寛永通寶	日本 (江戸) 1697	2.3	0.6	0.1	2.6	上:元	表裏面に赤錆の附着が認められる。	第3号墓 ソデ墓内
第12図 6 図版24の6	乾隆通寶	中国 (清) 1736	2.4	0.6	0.1	3.0	右:蘇 左:寶	鑄造局:江蘇寶興局 表裏面に赤錆の附着が認められる。	第3号墓 ソデ墓内

第8表 銭貨出土一覧

	第1号墓室内埋土	第2号墓腰櫃右部	第2号墓左短埋土	第2号墓墓礎トレンチ	第3号墓ソデ墓内
寛 永 通 寶	1	1			4
乾 隆 通 寶					1
五 銭			1	1	
不 明		1			



—



1



—



2



—



3



—



4



—



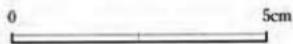
5



—



6



第12圖(因版24) 錢貨：(1~6)

第Ⅵ章 総 括

銘苅古墓群北E地区は、琉球石灰岩台地を掘込んだ古墓群である。調査対象は5基の墓であったが、本来はこれらの他にも周辺に墓が存在した可能性がある。

本地区は公団による土地区画整理事業区と花とみどり課による天久公園整備事業区にまたがっていたため、変則的な発掘調査となった。1号墓の調査は、花とみどり課による事業に伴い1999(平成11)年8月～2000(平成12)年3月、2号墓は、公団による事業に伴い2002(平成14)年6～8月、3～5号墓は両事業に伴い2003(平成15)年1～3月に行われた。

1・2号墓は基盤の石灰岩を掘込んだ亀甲墓である。周囲に石列を巡らし、比較的大規模な墓であったことが想定される。

3号墓は損壊が著しく、詳細は不明である。墓庭右垣にソデ墓があり、内部から銭貨5枚が出土したが、これらが原位置にあるかは不明である。墓室の床面に層厚1cmほどの炭が堆積しており、墓室右奥には一部黒色化した石灰岩が数点あった。これは、戦時中に防空壕として利用され、その際の遺物の痕跡と考える。

4号墓は基盤である石灰岩を横位に掘込んだ墓である。屋根は平坦であるが、これは米軍などの造成の際に削られたと推測される。正面の一部に僅かながら屋根の石積みと見られる痕跡が確認できる。

5号墓も4号墓と同様な形式の墓である。基盤を横位に掘込み、墓正面を切石で覆っている。屋根の形態は判然としにくい。墓庭左垣にソデ墓が確認された。

1号墓と2号墓の屋根観察の結果、赤土を載せその上に漆喰を塗布した痕跡が認められた。2号墓では墓周辺にも赤土を入れて造成し、その上に石列を並べた状況が確認された。

出土遺物は総数1,312点であった。この内、蔵骨器の出土は11点である。2号墓のみ調査直前まで使用されていたが、墓内の壺を全て移転後、調査に着手した。他の墓の墓室内には、安置された蔵骨器などはなかった。墓室内や墓庭など、その周辺から蔵骨器の破片や杯・瓶などの破片が得られた。

4号墓の墓庭左隅からは、沖縄産の杯・壺・煙管などが集中的に出土した。出土状況から考えると、意図的に埋めた可能性が高いと考える。県内の墓には碗・瓶などを埋納した事例がいくつか知られており、今回もそのような例の一つであると考えられる。

本調査区のある「那覇新都心地区」の中には、本区以外にも首里系・那覇系土族の墓だったとみられる「ナーチャー毛古墓群」や、「安謝西原古墓群」などがある。これらの古墓群と比較すると本調査区の1～3号墓は規模が大きく、富裕層の墓であったことが推測される。一方、4・5号墓は規模がやや小さく、墓内の造りなども簡素である。ここ天久の地には様々な階層の人々が墓を構築していたことがわかる。

今回の調査は5基という僅かな墓群であった。ここから得られる情報には限りがあるが、日々の開発によって古来の那覇の姿が失われつつある中、このような調査を行い情報を蓄積することによって、住時の人々の死生観などが窺われ、より一步、その人々のありように近づくことが出来ると思われる。本調査の成果も、その一助となり得ると考える。

註

1. 2000 金武正紀ほか 「ナーチャー毛古墓群」 那覇市文化財調査報告内 第44集

图 版





図版1 遺跡一帯の空中写真(1993年撮影、1:10,000)

【上が北】



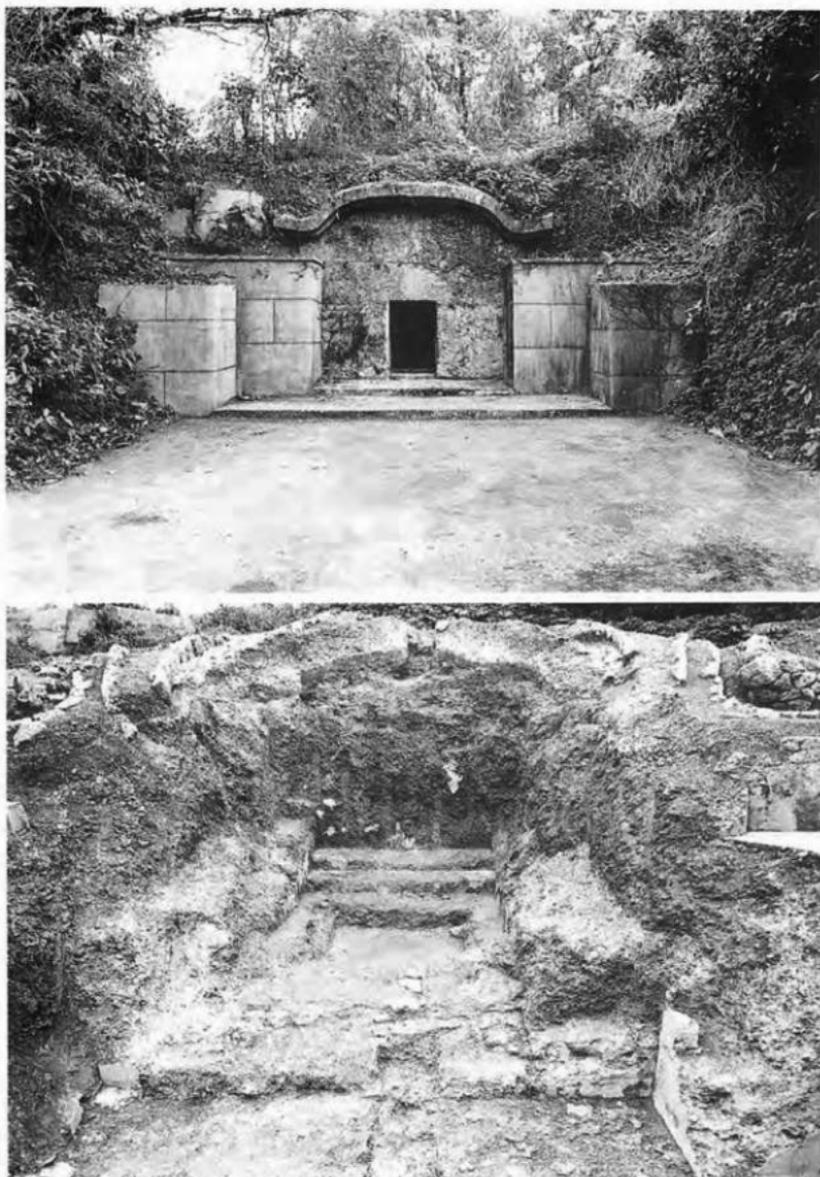
図版2 第1号墓中・近景
上：発掘調査前状況（北から）
下：墓検出状況（北西から）



図版3 第1号墓近景

上：墓検出状況（北西から）

下：周囲の石積み状況（南西から）



図版4 第2号墓近景

上：発掘調査前状況（北西から）

下：発掘調査後状況（北西から）



図版5 第2号墓発掘調査状況
上：墓周辺作業状況（北西から）
下：墓庭周辺作業状況（北から）



図版 6 第 2 号墓完掘状況①

上：屋根上左側からの状況（北東から）
 下：屋根上右側からの状況（南西から）



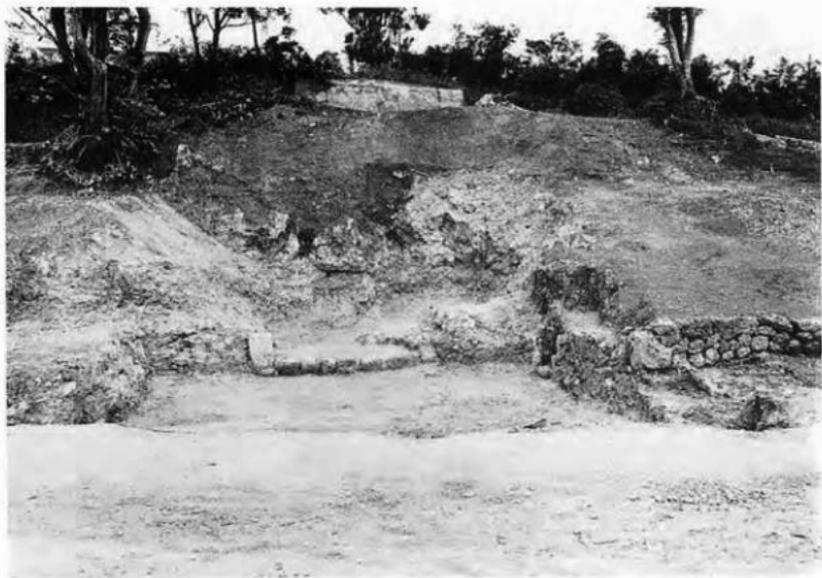
図版7 第2号窟完掘状況②
上：屋根上正面からの状況（南東から）
下：屋根上石積み状況（北から）



図版 8 第 2 号墓実測作業状況
上：平面図作成作業（屋根上石敷き）
下：平面図作成作業（墓庭外石積み）



図版9 第2～5号幕中・近景
上：中景（西から）
下：近景（南から）



図版10 第3号墓近景①
上：墓検出状況 (西から)
下：サンミデー部と墓室内状況 (南から)



図版11 第3号墓近景②
上：半截状況（北東から）
下：ソデ墓（北から）



図版12 第3号墓近景③
上：石槽み状況（北西から）
下：調査作業状況（西から）



図版13 第4号墓近景①

上：墓検出状況（西から）

下：調査作業状況（西から）



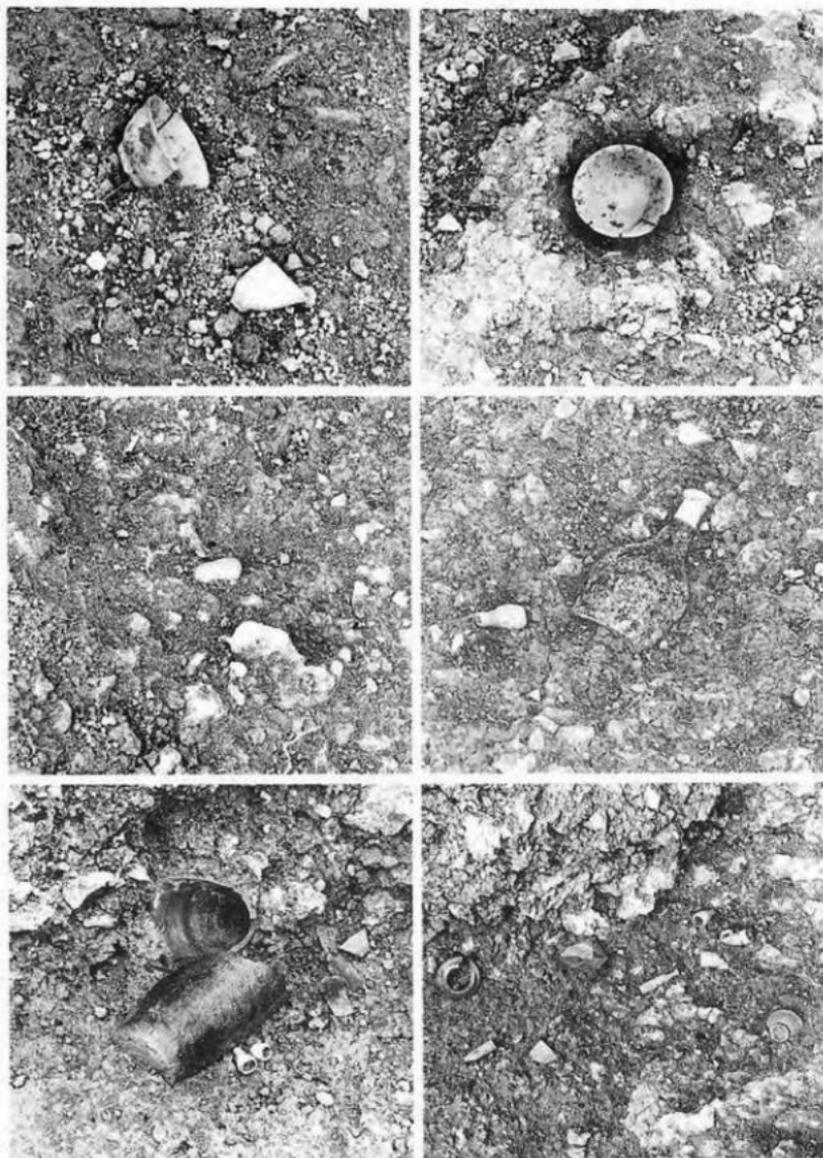
図版14 第4号墓近景②

上：石積み状況（南から）

下：半裁状況（北西から）



図版15 第4号墓室内
上：清掃前の状況（西から）
下：清掃後の状況（西から）



图版16 第3·4号墓遗物出土状况

1段目左：杯 (第3号墓庭左部)

2段目左：煙管 (第4号墓No.9)

3段目左：壺、煙管 (第4号墓No.1、10·11)

1段目右：杯 (第4号墓No.13)

2段目右：瓶、煙管 (第4号墓No.3、12)

3段目右：壺、杯、煙管 (第4号墓No.1、2、4~8)



図版17 第5号墓近景①

上：墓近景（北西から）

下：調査作業状況（北西から）



図版18 第5号第近景②
上：半截状況（北西から）
下：半截状況（北から）



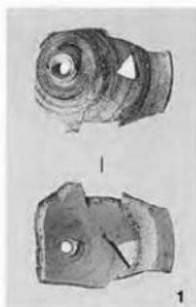
図版19 第5号墓室内
上：清掃前の状況（北西から）
下：清掃後の状況（北西から）



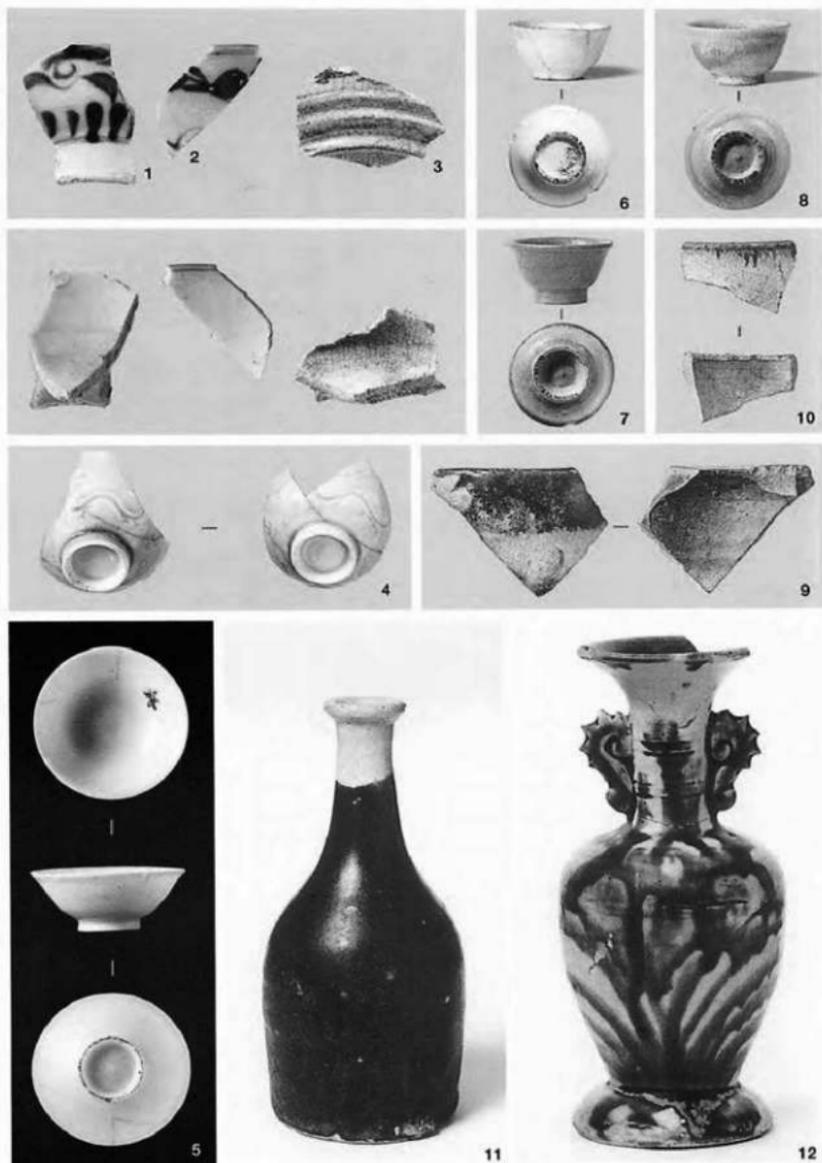
図版20 第5号墓近景③

上：ソデ墓検出状況（南西から）

下：ソデ墓検出状況（南西から）



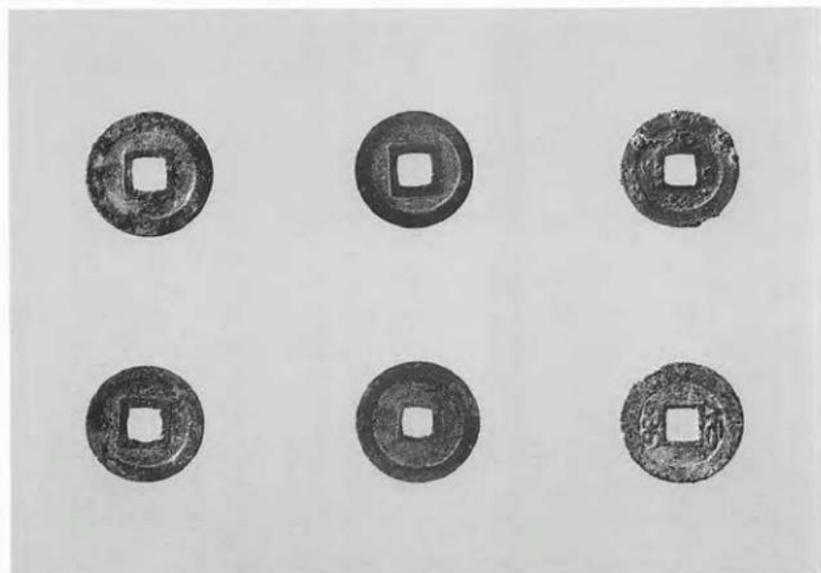
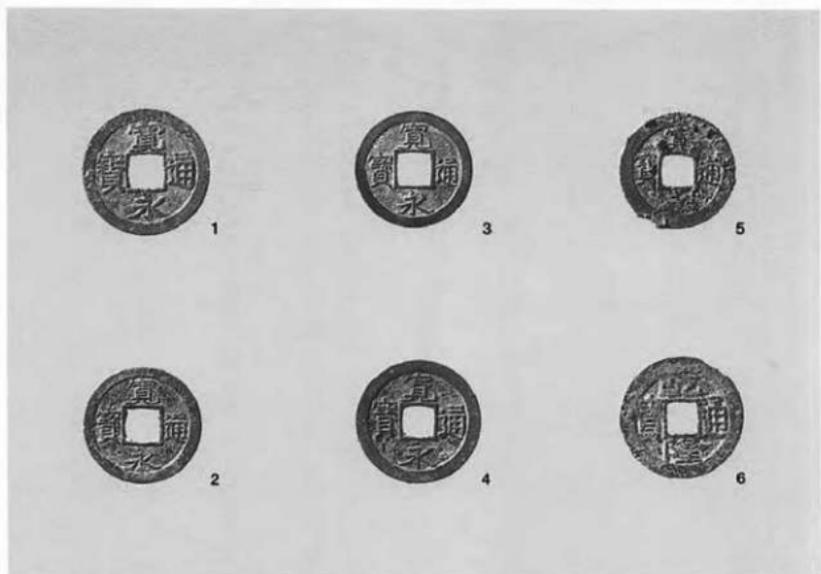
图版21(第9图) 藏骨器：盖(1~3)、身(4~7)



圖版22(第10圖) 容器：中國產磁器 碗(1·2)、器種不明(3)
 本土產磁器 杯(4-6)
 沖繩產施釉陶器 杯(7·8)、卮(9·10)、瓶(11·12)



圖版23(第11圖) 容 器：沖繩產無袖陶器 壺(1)
 煙 管：沖繩產施袖陶器製 (2-8)、青銅製 (9-10)
 簪：(11)
 器種不明：(12)



圖版24(第12圖) 錢貨：(1-6)

那覇市文化財調査報告書第59集

銘苧古墓群 (Ⅳ)

—那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅲ—

—天久公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅳ—

発行 2004年3月5日

那覇市教育委員会

〒900-8553 沖縄県那覇市樋川2-8-8

編集 那覇市教育委員会文化財課

TEL 098-853-5776

FAX 098-833-2202

印刷 有限会社 福琉印刷

〒900-0012 沖縄県那覇市泊2-19-8

TEL 098-867-1989
